

令和3年度 高齢者虐待事例

70 歳代高齢者のみ世帯のケース

高齢者

氏 名:守谷花子 (72 歳) 妻

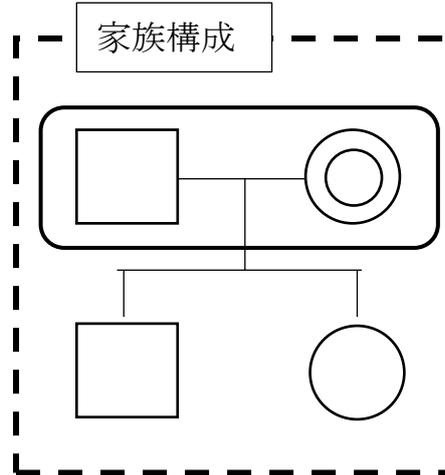
病 名:アルツハイマー型認知症
進行性核上性麻痺(※)

介護認定:要介護1(デイサービス利用)

養護者(同居家族:主介護者)

氏 名:守谷太郎 (74 歳) 夫

病院から虐待通報とからの介入となる。



※進行性核上性麻痺

症状:徐々に歩きにくくなり転倒が増える, 飲み込みが悪くなる, 認知症を併発する等進行性の神経難病です。

経緯

入院の際に, 本人の前身チェックをしたところ, 全身に不明なアザがあり特に左胸部には4cm×4cmの楕円形上のアザがあり, 本人へ問うと, 「お父さんにやられた～」と複数回聞かれる。そのため, 病院から市への通報となる。

これをきっかけに, 市と地域包括支援センターで情報共有を行い, 事実確認を行う。

病院でアザの確認を行う。アザは7箇所あり, 左胸部が一番大きく, あとは右ひじ・左上腕内側・左踵上・右足内側・両足正面の確認が取れた。

本人の認知症の状態, 病状を考え, 在宅での介護は困難と判断され治療後そのまま施設入所となる。

本人の様子

本人は認知症があり, 特に「妄想」が強く, 夫への過剰な嫉妬や作り話などが見受けられる状態。(「夜中に 7, 8 人くらいの男の人が出入りして殺しに来る」「主人が強盗に捕まっている。」「娘が殺された」等の発言がある。)

普段の動作は問題なく行えるが, 進行性核上性麻痺の影響から歩いているときのふらつきが目立つようになってきた。

夫の作った料理が気に食わないと流しに捨てたり, 夫を泥棒呼ばわりすることもあった。

令和2年 11 月に市内で行方不明となり, 自宅近くのガソリンスタンドで保護されることがあった。

養護者(夫)の様子

ケアマネジャーの情報から、養護者の夫は、本人の介護を懸命に行っていたが、認知症の進行により対応に苦慮していた。令和3年8月に本人が自宅から出ようとしたところ制止するも、いうことを聞かなかつたため、腕を握り制止したところ、本人の腕にアザを作ってしまったことがあった。また、その際、興奮状態の本人から手を挙げられたことがあった。

今回、本人の入院をきっかけに介護負担の軽減が図れ、本人の施設入所の必要性を直に感じられたとのこと。また、別居である娘も施設入所について協力的であり、施設入所についての手続き等支援してくれた。

事例の考察

今回の事例では、高齢者のみ世帯の家庭状況で、認知症の配偶者を介護する案件であった。

認知症高齢者の介護を行うことに対し、肉体的・精神的負担は非常に高い状態である。今回の事例では、夫は妻を介護するという使命感から、献身的に介護を行っていたが、介護負担が増してきたことをケアマネに吐露している状況があった。

ケアマネとしても、介護負担が多くなっていることから、介護サービスの追加を提案するも「大丈夫です。」とのことであった。別居の娘も、施設入所を勧めていたが、施設入所には至らなかった状態。

今回は、入院をきっかけに夫から「病院に入院していることで安心して睡眠がとれる。こんなに落ち着けるなんて久々だ。」との発言が聞かれ、その後本人は施設へ入所となった。

献身的な介護の延長上で虐待へ派生してしまうケースは多くある。そのため、介護の負担感の訴えを聴く機会の多いケアマネが、適切なケアマネジメントを行えるように、地域包括支援センターがケアマネ支援に取り組むことが重要であると改めて感じた。

